「仰天」のよみと意味

桒竹民

目次

はじめに
一、中国文献に於ける「仰天」
二、日本文献に於ける「仰天」
A「天ニ（ヲ）仰グ」の意味
B「仰天ス」の意味
C漢字表記の「仰天」の意味
結び

はじめに

日本語に流入した漢語には、よみによって意味が変わるというようなものが存在している。(1) 本稿で取り上げる「仰天」もその一例として考えられる。

さて、日本文献に於ける「仰天」は一体どのように訓まれるのであろうか。先ずその点について古辞書と古文献の用例を挙げながら考えてみよう。但し、今回管見のかぎりでは、鎌倉時代以前成立の古辞書には「仰天」が収録されず、

節用集を中心とする室町時代の古辞書には殆どその存在を確認できた。何故、「仰天」は鎌倉時代以前の古辞書に載っていないのか。それは、次に掲げる日本文献に於ける「仰天」の使用状況を示す表から分かるように「仰天」が日本語に流入した当初は一語としてではなく「天ニ（ヲ）仰グ」という連語形式で使用されていて、語単位としては扱われなかったため、掲載されなかったのであろう。また、鎌倉時代までの「仰天」は辞書に収録されうるほどに使用されていなかったことも理由の一つとして考えられよう。一方、鎌倉時代あたりから「仰天ス」という字音よみが登場するようになったため、一語として室町時代の古辞書には掲載されたわけである。古辞書に於ける「仰天」のよみを挙げてみる。

仰天（キャウテン）或作狂顛（キャウテン）驚怖ノ義也（アオグソラ）（文明本節用集833①）　仰天（キャウテン）　狂顛（キャウテン）（明応五年本節用集179⑦）

仰天（ギャウテン）おどろく也（和漢通用集371②）　仰天（ギャウテン）潰（ツブスキモヲ）レ膽（書言字考節用集12①）

のように、今回調査したかぎりの古辞書ではいずれも「仰天」を字音よみの一漢語として扱われている。それに対して古文献における「仰天」は次の例の示すが如く「仰天ス」という字音よみの他に連語として扱って、「天ニ仰グ」と訓読される例も認められる。(2) 無論よみの不明な「仰天」も少なからず見える。

跪（ⓒヲカム）て拜（ⓒヨモ）四（ⓒ一）ー方を。仰（ⓒ）天（Ⓐアメニ）（Ⓑア）一て　而祈（Ⓐコヒ給）。即（ⓒコヒタマフ）雷（Ⓐイ）（Ⓑイ）て大（Ⓐヒサメフル）（Ⓑヒサメフル）雨。（岩崎本日本書紀巻24皇極紀68）

王祥仰天（テニ）詔（ウタテカフ）好、（中山法華経寺蔵三教指帰注38ウ③）

仰（テ）レ天（ニ）屠（ト）裂（レツスレトモ）（六地蔵寺善本遍照発揮性霊集巻五178②）

仰天（ニ）（返点）高（シテ）聲（ヲ）（東寺観智院蔵注好選上オ16①）

仰天（テニ）（返点）嘆（ク）曰（同右上ウ24②）

臥地（ニ）仰天（テニ）云（ク）（高山寺明恵上人行状（上山本）巻中116⑨）

先仰天（シテ）敬畏（テ）（明恵上人資料第一・栂尾明恵上人物語337①）

陰陽師心得ず仰天して（宇治拾遺物語140）

日本文献に於ける「仰天」は右記の用例のように二通りのよみが存在していることが明らかになる。では、両種類のよみが「仰天」の意味にどう関わるのか。果してそのよみの違いによって意味の差異が認められるか否かについて検討してみたい。それに先立って、その出自となる中国語の本来の意味は如何なるものかを先に明らかにしておく必要がある。

一、中国文献に於ける「仰天」

この項では具体例を挙げながら中国語の「仰天」の意味用法について考究してみたい。

1．南郭子綦隠几而坐、仰天而噓。（荘子・斉物論第二）

南郭子綦は楚の昭王の庶弟であり、南郭は子綦が住んでいた所を指す。「仰天」は子綦が門人の子游と問答する場面で使われている。「南郭子綦がひじかけに凭れて坐り、天を仰いでほっと息を吐いた」という文意とされる。従って、「仰天」は顔を上に向けて上の方を見るという意味を表すと考えられる。

2．晏子仰天歎曰、嬰所不唯忠於君利社稷者是與、有如上帝。（春秋左氏伝・襄公22年）

崔杼が景公を君に立て自分はその宰相となり、慶封を左相に任命した。そして斉の国の人に対して大公の廟で盟い、「崔・慶に味方しない者があったら、上帝の罰を受けるであろう」といった。そういう崔・慶の野望に対して、晏子は「仰天歎」つまり、空を仰いで歎息しながら「この私がひたすら君に忠に国のために働く者に味方しないことがあったらこれを照覧する上帝の罰を受けるであろう」と、立向った。「仰天」は例①と同じ意味用法で使われている。

3．使者至呂望之。仰天嘆曰、吾嘗備位将相。年踰六十矣。（金澤文庫本群書治要巻第十九漢書七蕭望之傳515）（注、片仮名は傍訓、平仮名、句読点はヲコト点）

cf使者至、召望之。望之欲自殺、其夫人止之、以為非天子意。望之以問門下生朱雲。雲者好節士、勤望之自裁。於是望之卬(仰)天歎曰、吾嘗備位将相、年踰六十矣、(漢書巻78蕭望之傳3288③)

「仰天」は例(3)の「天ニ仰グ」のように一熟語ではなく述語と目的語という関係を成す連語形式で用いられている。日本語に入った「仰天」は当初はかかる連語形式の用法だったと思われる。だから、次に挙げる日本文献では連語形式としての「天ニ仰グ」というよみは一語としての「仰天ス」の字音よみより先に登場しているのである。例(3)の「仰天」も例①②と同じく上(空)を向いて見るという意味を表す。換言すれば、後続する「歎」という感情を表出する時の状態とも言えよう。

4. 鄒衍盡忠于燕恵王信譖而擊之鄒子仰天而哭正夏而天為之降霜(淮南子)

「仰天」は「哭」という哀痛の感情を表現する時の状態として用いられて、つまり「天を仰ぎながら号泣する」とされる。

右記した四例のように「仰天」は意味的に連語形式として使用され、その後に付く「嘘、歎(嘆)、哭」のような感情表出の状態を表す働きをする。それによって感情がよりつよく表れうることになる。次の用例も同様のことが言える。

5. 伍子胥仰天歎曰、嗟乎讒臣嚚為亂矣、王乃反誅我。(史記・伍子胥列傳第六2180②)
6. 慊々仰天歎、愁心将何愬(曹植・楽府)
7. 仰天大笑出門去、我輩豈是蓬蒿人(李白詩・南陵別児童入京)
8. 歌罷仰天歎　四座涙縦横(杜甫詩・羌村)
9. 劍擊風雲向夜悲　揖誓山河仰天泣(鐙炳詩)
10. 抬望眼、仰天長嘯、壮懐激烈(宋岳飛・満江紅)

の如く、「仰天」は「歎、笑、泣、嘯」という喜怒哀楽、歎息などの感情表現と共起して用いられている。彼様な用法上

の特徴は『史記』に於ける「仰天」からも察知できる。『史記』から「仰天」を十四例検出できたが、この中十二例もの「仰天」が右に列挙した例のように「歎（五例）、太息（二例）、大笑（二例）、悲號（一例）、大哭（一例）、大呼（一例）」といったような感情を表す表現と共に用いられている。中国文献に於ける「仰天」はかかる使用上の特徴を有しているため、『漢語大詞典』(3)の「仰天」の意味用法について「仰望天空（空を仰いで見る筆者訳）。多為人抒発抑鬱或激動心情時的状態（多くは人が抑鬱したり感激、感動したりする情感を表す時の状態に用いる筆者訳）。」といったような注釈が施されているわけである。但し、「仰天」は次の例のように感情表現と共に用いられない場合もある。

11. 衞平乃援式而起、仰天而視月之光、觀斗所指、定日處鄉。（史記・亀策傳第六十八3229⑦）
12. 古生仰天以手拍脳数四曰、此事大不易（唐・劉無雙傳83④）
13. 上憑肩而望、因仰天感牛女事（唐・楊太眞外傳45⑥）

以上の考察を通して中国文献に於ける「仰天」の意義について次のように帰納できるかと思う。

△顔を上に向けて上（空）の方を見る

このような一つの意義となるが、歎息、咏嘆などのような感情を表す表現とよく共起して使用されるといった用法上の特徴も見られる。また、右例(3)の「天ニ仰グ」の示すように中国語の「仰天」は目的語「天」と述語「仰」によって構成された連語形式として用いられることも指摘できよう。かかる「仰天」は日本文献に於いて如何に用いられているであろうか。以下日本文献に於ける「仰天」に目を注ぐ。

二、日本文献に於ける「仰天」

「仰天」の意味用法について考察するのに先立って日本文献に於ける「仰天」の使用状況及びよみのあり方を示す表を先ず掲げてみよう。表から次のことが言える。「仰天」は早くも奈良時代文献に登場して、日本語への進入の早かった

ことを物語っている。爾来、日本文献に於いて、和文を除いた他の文章ジャンルに使用されていた。平安時代まで史書、公家日記などの所謂和化漢文に偏用されて、記録用の文章語としての性格を呈出している。鎌倉時代以降になると、和漢混淆文特にその会話文にも用いられるようになったため、日常的用語に変わったように思える。更に、よみ方を見ると、連語形式としての「天ニ（ヲ）仰グ」は一語としての「仰天ス」より早く日本文献に現れている。つまり、中国語の「仰天」は日本語に入って依然として連語形式として受容されて、「天ニ（ヲ）仰グ」という形で対応していた。「仰天ス」はそれを土台に後に生まれたものであると考えられる。

時代	文章ジャンル	考察対象／文献	仰天	天ニ（ヲ）仰グ	仰天ス	用例数
奈良	漢文	日本書紀		2		2
平安	漢文	小右記	2			2
平安	漢文	一條天皇御記	1			1
平安	漢文	中右記	1			1
平安	漢文	平安遺文(1-10)	3	1(1)		4(1)
平安	漢文	高野山古文書	1			1
平安	漢文	六地蔵寺善本遍照発揮性霊集		1		1
平安	漢文	東寺観智院蔵注好選		5		5
鎌倉	漢文	玉葉	5			5
鎌倉	漢文	名月記	1			1
鎌倉	漢文	三長記	1			1
鎌倉	漢文	平戸記	7			7
鎌倉	漢文	吾妻鏡	2			2
鎌倉	漢文	鎌倉遺文(1-16)	5	2		7
鎌倉	漢文	高山寺明恵上人行状		1		1
院政	和漢混淆文	今昔物語集		5		5
院政	和漢混淆文	中山法華経寺蔵三教指帰注		1		1
鎌倉	和漢混淆文	十訓抄		2		2
鎌倉	和漢混淆文	栂尾明恵上人物語			1	1
鎌倉	和漢混淆文	栂尾明恵上人伝			1	1
鎌倉	和漢混淆文	平家物語(延慶本)		13		13
鎌倉	和漢混淆文	宇治拾遺物語			1	1
鎌倉	和漢混淆文	宝物集		1		1
鎌倉	和漢混淆文	愚管抄			1	1
室町	漢文	宝簡集	2			2
室町	漢文	後愚昧記	1			1
室町	漢文	親長卿記	3			3
室町	漢文	宣胤卿記	4			4
室町	漢文	園太暦	13			13
室町	漢文	教言卿記(1)	2			2
室町	漢文	多聞院日記(1-3)	14	1	2	17
室町	和漢混淆文	地蔵菩薩霊験記	2			2
室町	和漢混淆文	堺記	1			1
室町	和漢混淆文	太平記			1	1
室町	和漢混淆文	室町時代物語集		2		2
室町	和漢混淆文	天理図書館蔵伊曽保物語		1	2	3
		合計	71	38(1)	9	118(1)

（注、（　）内の数字は重複例の数を示す）

以下、日本文献に見える「仰天」の意味用法について考える。その手続きとして先ずよみの確定できた「仰天」を別々に取り上げて、各々の意味用法を検討、解明する上で、よみによる意味の差異が有るか否かを比べてみる。更に、よみの不明な「仰天」を中心にその意味用法について考察を加えて、よみの明らかな「仰天」との関連を探る。よみの明らかな「仰天」とそうでない「仰天」との意味上の重なりようによって、よみの明らかでない「仰天」のよみを求めようとする。そこで次に先ず「天ニ（ヲ）仰グ」を巡って考察する。

A「天ニ（ヲ）仰グ」の意味

時代別に具体例を挙げながら考える。奈良時代の漢文文献から二例を検出できたが、その二例とも『日本書紀』に見えるものである。

1. 我国法違ニ背所レ盟。雖レ曰ニ国王一当レ受ニ奴手一明天仰レ天大息涕泣。許諾曰。（日本書紀巻十九欽明天皇85③）

cf（樊）於期仰天太息流涕曰、於期毎念之、常痛於骨髓、顧計不知所出耳（史記刺客列傳・荆軻傳第二十六2532⑦）

2. 八月の甲申の朔に、天皇、幸南淵の河一上に跪て拜四一方を。仰天に而祈。即雷大雨。

（岩崎本日本書紀巻二十四皇極紀68）

cf太守憂民仰天祝、願嘘氛霾看晴旭（韓琦廣陵大雪詩）

「仰天」は参考例と同じように中国語の本来の意味用法で用いられていると考えられる。特に、例(1)の如く前文の恐怖と後続文の歎息を表す表現と共に使われて、その状態を示すことは出自となる中国語と変わらない使用上の特徴を見せている。次に平安時代文献に目を向けてみよう。

3. 空海偶登ニ崐一。嶽未レ得レ満レ懐仰レ天屠裂無レ人知レ我（六地蔵寺善本遍照発揮性霊集巻五178②）

「仰天」は前文「未レ得満レ懐」の失意感によって生じた、「屠裂」の悲痛の極まりという比喩的な感情を表現する状態として用いられている。奈良時代のと同様に中国語の本来の意味用法のままで使われている。

4．境内民薄、聞而勘人、課徭無丁、兢而仰天（平安遺文三776下⑪）

「仰天」は「兢」の驚き、歎きという気持によって顔を挙げて空を見るという状態を表す。

5．孟宗忽到竹薗（返点）捕其枝（返点）仰天（返点）高聲（返点）泣悲（東寺観智院蔵注好選上16表①）

6．自負江水（返点）供母。大旱遂仰天（返点）泣（同右上15裏①）

7．童子涙至河中（返点）仰天（返点）嘆曰（同右上24裏②）

8．丹仰天（返点）首白烏来伏地（返点）馬角生来也（同右上27裏②）

9．即王仰天（返点）高泣天為之（返点）乗雲（返点）下来（同右上33裏②）

のように、「仰天」は「泣悲、泣、歎」のような感情表現と共起してその状態を表し、その気持ちをつよく感じさせる。例(8)の「仰天」は「伏地」と対をなして用いられ、天を見上げたり地にうつぶしたりして身悶えしながら祈念するさまを表す。「仰天伏地」[5]は慣用的な表現で、次の鎌倉、室町時代文献にも多く用いられている。また、「仰天臥地」「仰天倒地」更に「臥地仰天」を反転した類型的な表現も見られる。「仰天」よりは悲歎などの気持ちをよりつよく表出することになる。

平安時代の「天ニ（ヲ）仰グ」は奈良時代のそれと同じ中国語の意味用法をそのまま摂取していると言える。尚、「天ニ（ヲ）仰グ」を確認できなかった和文には「空を仰ぐ」という表現が見えて、顔を上に向けて空を見ることを表す。「天ニ（ヲ）仰グ」の欠如によるその意味分野の空白を補完すると考えられる。

△空を仰ぎてながめ給ふ。（大系本源氏物語・柏木48⑤）

△女ばらも、空を仰ぎてなむ、そなたに向きて、喜びきこえける。（同右・蓬生159⑤）

△「かしこの御手や」と、空を仰ぎて、ながめ給ふ。（同右・葵353③）

△さりともあふぎて空を憑哉月日のいまだおちぬ世なれば（風雅和歌集巻十七1805）

次に院政、鎌倉時代文献に於ける「天ニ（ヲ）仰グ」を考察する。先ず漢文に見える用例を挙げてみる。

10. 爰上人同交此中ニ瞻仰之處、悲泣愁嘆臥地ニ仰天ニ云、（高山寺明恵上人行状（漢文行状）（上山本）巻中116⑨）

'10. 爰上人同交ニ此中ニ瞻ニ仰之ニ處・悲ニ泣愁歎臥レ地仰レ天云（同右（報恩院本）巻中185④）

「伏地」ではなく「臥地」となり、而も「仰天臥地」を「臥地仰天」と反転した例である。形は変わったが、意味用法は「仰天伏地」と変わらないであろう。続いて和漢混淆文の「天ニ（ヲ）仰グ」を検討する。管見の和漢混淆文から二十四例の「天ニ（ヲ）仰グ」を見出したが、その中の九例は「天ニ（ヲ）仰地ニ伏（臥・倒）」といったような慣用的表現となっている。それらはいずれも平安時代のそれと同じくあまりの悲痛、愁歎のため身悶えするさまを表す。

11. 燕丹、此レヲ聞テ、泣キ悲ムデ、天ニ仰テ願フニ忽ニ白キ烏ノ頭ヲ得タリ地ニ伏テ請フニ角生タル馬来レリ。（今昔物語集巻十339⑦）

12. 天ニ仰ギ地ニ臥テ、又ヲメキサケブ（延慶本平家物語第二本22ウ①）

13. 是ヲ具テハ、天ニ仰地ニ倒テヲメキ叫者多カリケリ（同右第四60ウ⑤）

例(11)は右記の『東寺観智院蔵注好選』例(8)と類似している。

14. 國王、此ヲ歎キテ天ニ仰テ祈請シ藥ヲ以テ療治スト云ヘドモ、煩フ事弥ヨ増テ愈ル事无シ。（今昔物語集巻第四320⑤）

15. 「形貌美麗ナル児、泣キ悲ムデ、此ノ河ヲ渡ツル間、河中ニ至テ天ニ仰テ歎テ云ク、（同右巻第九214⑦）

16. 聖人、獄ニ被禁タリ云ヘド、更ニ云フ事无シ、天ニ仰テ、泣ク誓テ云ク、（同右巻第二十156⑮）

17. 母、此ヲ見、火丸ガ髪ヲ捕テ天ニ仰テ、泣ク云ク、（同右197③）

18. 母魚（ト）江の水ツト好フ事アリキ、王祥仰天詔好、（中山法華経寺蔵本三教指帰注38ウ③）

19. 牛頭馬頭ヵハケシキコヱキクニキモソウシナフ天ニアウヒテナカムトスレトモ涙ヲチス（書陵部蔵宝物集7ウ⑨）

20. なにの益かあらんと、天に仰ぎてさけびて、（彰考館蔵十訓抄中95⑭）

21. 經範天に仰ぎてかなしみて、（同右105⑥）

のように、「天ニ仰グ」は前の時代に続いて依然として本来の中国語と変わることなく感情表現「泣、悲、歎」、情感を訴える「祈請、詔好、叫」などの表現と共起してそれらの状態を表す。残りの和漢混淆文に見える「天ニ仰グ」についても検討してみたところ、いずれも右記の用例と同じように用いられていると判断される。

右の考察で明らかになるように院政、鎌倉時代文献に於ける「天ニ（ヲ）仰グ」は奈良、平安両時代のと変わることなく中国語の意味用法を継承している。そればかりか、次のような類型的で、意味上も似通った表現も確認できた。

△此レニ依テ、母、食時ヲ過グト云ヘド、不飲食ズシテ歎テ居タリ。孟宗、此ヲ見テ天ニ向テ歎テ云ク、（今昔物語集巻九190③）

「天ニ向テ」となっているが、同じ説話で、上記した例(5)の『注好選』では、「天ニ仰グ」で表現されている。つまり、「天ニ向テ」は「天ニ仰グ」と類義表現であると言えよう。また、

△我鎮西ニ被流ニ之後、偏ニ仰仏天ニ願ゼシ様ハ（延慶本平家物語第四14オ⑦）

△我山仏法、将以滅之逃也。汰而有余。仰蒼天ニ而押涙。悲而何為。（同右第一本78オ⑤）

という表現も見られる。更に和文に見える「空を仰ぐ」と同じものも存しているが、感情表現と共に用いられている点では和文の「空を仰ぐ」と相違しているようである。

△此ニ依テ、上中下ノ人、空ヲ仰テ歎キ合ヘル事、无限シ。（今昔物語集巻十七516⑬）

△勧メテ遣タルニ、其レドモ亦返来テ、空ヲ仰テ、極ク心不得ヌ気色。（同右巻二十162⑫）

室町時代に降っても「天ニ（ヲ）仰グ」は前の時代に続いて依然として中国語の本来の意味用法で用いられる。それは管見の及んだ当時代文献から検出できた四例の「天ニ（ヲ）仰グ」を挙げてみれば明らかにされるのである。

22. 傍ニ十才計ノ童一人悲涙無限、天ヲ仰地ニ伏シ聲ヲハカリニ歎息、（多聞院日記一356上⑰）
23. 舟の底にうち伏し、天に仰ぎ地に伏して、悶え焦かれ給ふ。（室町物語集上226⑤）
24. 「何となりたる事ぞや」と天に仰ぎ地に伏し、歎く有様あはれなり。（同右335⑩）

のように、四例中の三例は「天ニ（ヲ）仰地ニ伏」という、已に平安時代に見える慣用的な表現として用いられている。慣用的な傾向が保たれていると言えよう。それのみならず、慣用句としての度合も一段と強まっているようである。それは例(23)からも察知できる。例(23)の示すように、先ず、舟の上では「地ニ伏ス」ことが出来ないし、また、已に舟の底にうち伏しているため、どうして「地ニ伏せる」のかといったことから、「天ニ仰地ニ伏」は、本来の「天を見上げたり頭などを地につけたりする」という具体的な動作性を失って、悲痛、歎息などの感情表現を修飾してその程度の甚しさを表すようになっていることが考えられる。いわば、連用修飾的な用法として用いられている。

25. 「もっとも然るべし」とて各天に仰、「我主人を与へ給へ」と祈誓す。（伊曽保物語25蛙が主君を望む事）

「天ニ仰グ」は本来の意味用法で使われている。つまり、空を見上げて祈って誓いを立てるという意味である。

以上、室町時代までの「天ニ（ヲ）仰グ」について具体例を列挙しながら検討してきたところ、その意味用法は、訓読された中国語の「仰天」のそれをあるがまま受け継いでいることが明らかになる。特に「天ニ（ヲ）仰地ニ伏（臥・倒）」という慣用的表現が多用されることは注目に値する。それは「天ニ（ヲ）仰グ」よりつよい表現効果を有するものである。

B「仰天ス」の意味

以下、「仰天ス」について具体例を挙げて考察を加える。今回管見に入った日本文献から検出できた「仰天ス」の用例はいずれも鎌倉時代以降のものばかりである。調査の不足によることもあるが、現段階としては「仰天ス」は「天ニ（ヲ）仰グ」より後に出現したよみであると言ってもよい。即ち、日本語に吸収された「仰天」は先ず「天ニ（ヲ）仰グ」と訓読されて、その後にまた「仰天ス」の字音よみが生まれたといったよみの変化過程が推定できる。但し、「天ニ（ヲ）仰

グ」は「仰天ス」の登場によって消えたのではなく、「仰天ス」と共存している。それは何故であろうか。後に考える。

26. 泰時朝臣先年此上人ノ徳ヲ聞及給シカハ先仰天シテ敬畏テ席ヲ去テ奉居、（明恵上人資料第一・栂尾明恵上人物語337①）

′26. 泰時先年六波羅ニ被住時、此上人之徳ヲ聞及給シカハ、先仰天シテ敬ヒ畏テ席ヲ去テ上ニ居ヘ奉ル、（同右・栂尾明恵上人傳395④）

「仰天ス」と字音よみとして用いられている。上人の大徳を聞いた前文と敬畏して席を去った後続文との内容を考え合せると、「仰天ス」は本来の「天を見上げる」という意味ではなく、大いに驚嘆することを表すと考えられる。つまり、「泰時が上人の賢徳を聞いて、大いに驚嘆し、畏席を立ち去った」と解せられる。「仰天ス」が「大いに驚嘆する」という意味として用いられていることは、次に挙げる、右の二例とほぼ同じ内容の『明恵上人行状（繪傳記）』に見えた同場面の例によって証されうる。

△泰時、此上人の徳を日来聞及給しかは、大に驚き、畏席を避て、上に請し奉られけり、（明恵上人資料第一、480⑮）

のように、内容としては殆ど一致しているが、「仰天シテ」のところに「大に驚き」を入れ換えて、「仰天シテ」の示す意味を担っている。従って、右例の「仰天ス」は「大いに驚嘆する」ことを表していることに疑いを容れないであろう。彼様な意味は以上の考察で明らかなように「天ニ（ヲ）仰グ」には見られず、「仰天ス」の独自のものであると言える。つまり、「仰天ス」と「天ニ（ヲ）仰グ」とは、同じ中国出自というものの、そのよみの違いによって意味上の差異が明らかに存している。更に、「大いに驚嘆する」という新しい意味は「仰天ス」という字音よみに伴って発生したものであるとも言えよう。尚、中国語と比較してみれば、意味の変化も起こっているように見える。さて、「大いに驚嘆する」という新たな意味は果して鎌倉時代に生じたのか、この点については漢字表記の「仰天」を合せて考える必要がある。

次に残りの「仰天ス」の用例を検討する。いずれも右例と同様に用いられていると判断される。

27. 上人聲をあげて大に泣（なき）て、陰陽師（おんやうじ）にとりかゝれば、陰陽師、心得ず仰天（ぎやうてん）して、祓をしさして、「是（これ）はいかに」とい

ふ。（宇治拾遺物語140③）

cf此レヲ聞テ音ヲ放チ大キニ叫テ、陰陽師ニ取リ懸レバ、陰陽師心モ不得ズシテ、手ヲ捧テ⑦秡ヲモ不為シテ「何ニ何ニ」ト云フ。（今昔物語集巻十九61⑫）

「仰天ス」は突然声をあげて号泣してとりかかるという前文から推して非常に驚くという意味で用いられていると思われる。つまり、「陰陽師が上人に突然大声で泣かれ、とりかかられて大いに驚く」と解釈される。人間の「驚く」は、不安、恐怖、怒り、感心などの基礎にあると考えられる情動であり、大きな物音や新奇な、突発的なことなどが起こって生じる感情的な行為であるように思われる。例(26)(27)の「仰天ス」は正にかかる条件下で生じた「驚く」情動であろう。例(26)は上人の賢徳に対しての感心、例(27)は突然のことによる不安といったような感情が働いているため「大いに驚く」ことが生じるのは自然ではないかと思われる。次の「仰天ス」は会話文に使われていて、日常用語的な性格が現れているように見える。

28.「…コノヤウヲ申候ハバ、イヨ〳〵腹立シ候ハバ不孝ニモ候ベシ。チヽノ申候ヘバトテ承諾シ候ハバ世ノタメ不忠ニナリ候ヌベシ。仰天シテ候」ナド申サレタリケルヲツカハサレタリケレバ、（愚管抄巻四213③）

頼長に摂籙の座を譲与することについて父忠実と長男忠通とが正面衝突となる。「仰天ス」は両者のやりとりに用いられて大いに驚き歎くことを表す。

29.結句寄手東西の坂より追つ立てられ、引き退きたる兵どもは京中になほ足を留めず、十方へ落ち行きけるあひだ、洛中以つての外に無勢に成つて、いかがはせんと仰天す。（太平記巻十七京都両度軍の事）

軍勢が不意に洛中に充満しているという非常事態に対して、武家方ではどうしたものかという場面に使われている「仰天ス」は大変驚いたり歎いたりする意味で用いられている。

30.内ヘナワニ取付テ子ノ母取上ニ入ル、既ニ引上テ母トモニ取ントスルニ、井筒ノキワヨリ又中ヘ落入ル、扨〻ト思

ヒ仰天シテ、夢心ニ情ニ不入故ニ如比、（多聞院日記二191下⑮）

31. 知足屋ニ泊ノ夢ニ、大風廣ニワノ池ノアリシカ、則時ニ水減、大地震、仰天テニワニ出レハ、クソヲフミ、足ヲ洗ト見了、不吉也云々、（同右三189下⑪）

二例とも夢に突然起こった恐怖を感じる事件に「仰天ス」が用いられている。「仰天ス」は非常に驚き慌てることを表している。右掲した同じ『多聞院日記』の例(22)「天ヲ仰グ」と比べてみれば、両者は意味が明らかに異なっている。これは室町時代になって、「仰天ス」という字音よみによる変化義が已に存していても、「天ニ（ヲ）仰グ」が全くその影響を受けずに、依然として本来の意味のままで使用されていることを反映している。つまり「天ニ（ヲ）仰グ」と「仰天ス」は相互排斥という関係ではなく、各々の意味範囲を保ちながら、共存関係を維持していると言えよう。これは『伊曽保物語』に於ける「天ニ仰グ」と「仰天ス」の意味関係からも明らかにされる。

32. 其時シヤント仰天して、ひそかにイソポを近づけ、（伊曽保物語上33②）

33. その庭鳥をさし放し、あとを見かへるひまに、庭鳥すでに木にのぼれば、狐おほきに仰天して、むなしく山へぞ帰りける。（同右下104①）

「仰天ス」は大変びっくりすることを示し、同物語に見える右記の例(25)「天ニ仰グ」と意味がはっきり違っている。「仰天ス」は「大いに驚いたり歎いたりする」という意味として日本文献に用いられているため、右掲した室町時代成立の古辞書には「仰天」に対して「驚怖、おどろく」などの注釈が付けられているのである。また、『邦訳日葡辞書』にも次のような解釈が与えられている。

Guiôten（仰天）Tenniauogu（天に仰ぐ）すなわちvodorogu（驚く）驚愕、guiôtensuru（仰天する）驚く。（302頁）

更に次に挙げる用例の「驚天ス、驚顚ス」のように、本来「仰天」で表記すべきところに、意味に基づいた表記を可能ならしめたかと考えられる。

△師弟もろともに驚天（きやうてん）しておはします。（赤木文庫蔵愛宕地蔵之物語506下⑥）

△矍鑠トツ、ラヌニシテマツコウテアツ、ルヲ不見、而俄見アツト驚顛シテツ、ケテ人ヲ見タ臾也（杜詩続翠抄十292⑤）

以上、「天ニ（ヲ）仰グ」と「仰天ス」についてその意味用法を考察してきた。日本語に流入した「仰天」の両よみの成立についての先後関係及びよみによる意味の違いなどの点が判明したかと思う。以下、その結果を踏まえながら、漢字表記でよみの不明である「仰天」を巡ってその意味用法を検討し、意味の比較によってよみの確定を試みる。

C　漢字表記の「仰天」の意味

漢字表記の「仰天」は平安時代から室町時代にかけて公家日記などの古記録類に使用されている。その意味用法は「天ニ（ヲ）仰グ」「仰天ス」と異なる独特なものなのか、それとも両者との関連性を持っているものなのか。以下、それらの点について考究を進める。先ず今回検出できた漢字表記の最も早い「仰天」の例を挙げてその意味用法を考える。

34.十五日、己未、左衛門督頼通卿参春日、雲上侍臣、北（地シキセ）下四位五位六位悉以催役随身参入、為不饗應、除（深）結忿怨云々、大和国司輔尹、仰天抱膝、無方供給云々、（小右記二168⑤寛弘八（1011）年二月十五日条）

cf 毎晨夕従容、常抱膝長嘯（裴松之注引三国魏魚豢魏略）

cf 縄状繩（キヤウ）負（セレハ）獄傍盗士抱膝仰（ノノキ）歎（ハ）（大谷大学本三教指帰注集巻下3オ①）

「仰天」は参入者があまりに多いという前文と「無方供給」の後続文とを合せて考えると、大和国司藤原輔尹が単に天を見上げるだけではなく、参考例の「抱膝」に続いた感情表現のように「歎息」または思いのほかの多い参入者に「驚く」というような気持ちも込められているように思われる。但し、「仰天ス」のような意味には至っていないが、その方向に傾斜している。「仰天」は「抱膝」と対を成して用いられているため、「顔を上げて上の方を見る」という具体的な動作性を保っているように見える。従って、「仰天」は「天ニ（ヲ）仰グ」と訓読された方が妥当ではないか。

35.蝗虫遍満国々攝津・伊勢・近江・播磨云々、又所聞之国々、災禍旁起、貴賤仰天、今日不可聞食内議之由、（小右記

四213②寛仁元（1017）年八月三日条）

cf蝗虫遍満、到攝津国者、是只所聞及、諸国一同、天災欤、時務非理、災殃得所欤悲哉、（同右八月二日条）

cf近日山城、丹波蝗虫成災万人愁苦、（同右七月二十八日条）

参考例のように蝗虫の災についての報告を受けて「悲」「愁苦」の感情を表出している。しかし、同じ災禍を書き記した例(35)を見ると、「仰天」のみで、あるべき感情表現は見当たらない。また、右の考察で分るように「天ニ（ヲ）仰グ」は「咏嘆、歎息」などの感情表現と共起するのが一般的であるが、例(35)では「仰天」を以て文を切っている。更に「災禍旁起」という突発的で不安を感じる前文をも考え合せると、「仰天」は「天ニ（ヲ）仰グ」の示す「顔を上げて上（空）の方を見る」というよりも寧ろ「歎、愁、驚」などのような情感を表す意味が濃厚であるように思われる。かかる意味用法の「仰天」は「仰天ス」と一語として扱われる方が自然ではないか。但し、意味としては鎌倉時代に見られた「大いに驚く」という意味のみならず、「歎、愁」なども内包していると言える。

36.凡近代従去春三月以後、大辨上卿已絶了、七辨之憂、仰天伏地訴此事也。（中右記巻三161⑩）

「仰天」は「伏地」と共に用いられている。右に考察した「天ニ（ヲ）仰地ニ伏」という慣用的表現は「仰天伏地」という漢語表現があって、それを訓読して始めて形成できたのである。例(36)の「仰天伏地」は「天ニ（ヲ）仰地ニ伏」と同じ意味用法で、あまりの悲痛に身悶えしながら、「訴此事」と解される。「仰天伏（臥）地」は鎌倉時代の文献にも散見する。

37.十三日御喪事一定云々、哀慟之至、無物取喩、年来偸待再覲、今已聞此事、仰天伏地、迷惑之外無他耳。（平戸記二220下⑤）

38.仰天臥地令泣涕申云、（鎌倉遺文八339下⑬）

39.持参硯蓋、経公卿前入階間置御座前中央、仰天置之（一條天皇御記264⑤）

朝廷という場と「置御座前中央」という前文から推して、例(39)「仰天」の「天」は空間の「天」ではなく、「天皇」の意味を表すのである。「仰天」は「天皇ニ仰グ」意味で用いられる。つまり、硯蓋を御座中央に置く場合は天皇を拝謁してから「置之」のが礼法に適う作法であろう。このような「仰天」は『玉葉』にも見られる。

40.相論之間、泰親朝臣仰天而請天判、若泰親申非彗、申彗者可蒙天罰（玉葉三62下⑯）

「仰天」の「天」は例中の「天判」の「天」と同様に「天皇」のことを指すかと思われる。かかる「天」の成立は「天皇」という日本的な称号に由来していると考えられる。[8]「天皇ニ仰グ」ことを表す「仰天」は、中国語には確認できず、日本文献に於いても右の例の示すが如く日記類に偏用されているように見える。

41.天下事起自倉卒、人皆仰天云々、（玉葉三933上⑧）

「天下の事倉卒より起り」という前文の突発的な出来事に対して用いられていることと、感情を伴わずに単独で使われていることとを合せて考えると、「仰天」は「倉卒より起こったことに」大いに驚き歎くということを表して、「仰天ス」と字音よみすると考えられる。

42.前右大将家令レ下ニ向関東一給。前後随兵以下供奉人如ニ御入洛之時一。但駿河守廣綱今暁忽逐電。家人等皆不レ知レ之。仰天云々。（吾妻鏡第十428⑦）

相随して関東に帰るべき駿河守廣綱が「忽逐電」したのに対して、例(41)と同じく大変驚くという気持ちは強烈であるが、困惑、歎息するような心情も含んでいると見られる。但し、次の『吾妻鏡』の「仰天」は只「大いに驚く」ということを表すのみで用いられて、意味内容の限定化を見せている。同時代の和漢混淆文に於ける「大いに驚く」ことのみを表す「仰天ス」も合せて考えると、鎌倉時代の「仰天ス」は平安時代のような「歎、愁」などの意味を捨象して「大いに驚く」だけで用いられるようになったのではないかと推定される。

43.（五月廿九日）相州。武州等卒ニ大軍一上洛事。今日達ニ叡聞一云々。院中上下消レ魂云々。（六月一日）為レ傾ニ官軍一参洛

之東士不レ知ニ幾千万ニ之由申之。院中諸人仰天之外無レ他云々。（吾妻鏡第廿五770⑨承久三（1221）年六月一日）

同じ関東の大軍が上洛することに対して、五月廿九日条に「院中上下」が「消レ魂」、一方、六月一日条に「院中諸人」が「仰天」と、類義的な表現が別々に用いられている。それは、記録者の同じ心境を表すために表現上の重複を避けようという意識によるものである。「仰天」は「消レ魂」の示す「非常に驚く」の意味と同じと考えられる。

44. 災変最前之政途、其法可然哉、凡未曽有事也、如此御政一切不可叶事也、凡世間之法、諸人仰天之外無他歟、世上鉗口、莫言々々。（平戸記三57下①）

cf 今有此事、希異之変災也、心詞不及云々、此事返々可恐々々天下之様尤不審也、不能具記、驚恐之外無他、（同右67上②）

同じ災変（彗星の出現）に「仰天」と「驚恐」とが用いられて、「大いに驚き怖れる」気持ちを表している。

以上、平安、鎌倉時代文献に於ける漢字表記の「仰天」について考察してみた。意味用法としては「仰天ス」と、「天ニ（ヲ）仰グ」と重なるものもあれば、「天皇ニ仰グ」という漢字表記「仰天」の独特なものもある。尚、「仰天ス」と類似した意味には、「大いに驚く」というものもあれば、「歎、愁」なども含めているものも多くある。

さて、室町時代の漢字表記「仰天」は如何にして用いられるであろうか。次に十四例も検出できた『多聞院日記』（一～三）に於ける「仰天」を中心に検討を加えよう。

45. 今日四過二郡山ニテ順慶腹切ス（ト）申来、以外仰天ノ處順慶ニテハナシ、傳五ニ腹切セ了ト申来、肝消ス處ソレモウソ也（多聞院日記三226下⑪）

「仰天」は同じ「腹切」に対して用いる「肝消ス」と同じ非常にびっくりすることを表している。記録者の同事件に同じ言葉を使わないように類義的な表現を用いるという工夫が伺える。

46. 去六日戌ノ終ニ、兩度マテ大地震、仰天畢、帝尺動云々、（同右一268上⑩）

「仰天」は「大地震」に大変驚いたことを表す。『多聞院日記』（一―三）に見える漢字表記の「仰天」は例(45)の「腹切」のような意外で、突発的な事件によるものが八例で、例(46)の「大地震」などの自然災害の突然発生によるものが六例となっている。「仰天」を生じさせた出来事から見れば、十四例の「仰天」はいずれも「大いに驚く」という意味を表し、意味内容の限定化を遂げたかと思う。

但し、室町時代の漢字表記の「仰天」は、すべて右例のような意味用法で使われるのではなく、次の例のように「天ニ（ヲ）仰グ」というよみで、中国語の本来の意味用法を継承しているものも見られる。

47. 道路ヲ失ヒ仰天拭涙伏地叫ケリ（地蔵菩薩霊験記中50下⑤）

48. 歡喜ノ眉ヲ開ン。諸佛モ亦然ント示シ給フカト思ヘバ夢覺ヌ。藤次仰天信心ヲ至シ。（同右上30下②）

以上、よみの明らかでない漢字表記の「仰天」について考察してきた。分析に基づけばその意義は次のように帰納できる。

(一)顔を上に向けて上（空）の方を見る

(二)敬って天皇を見上げる

(三)大いに驚き歎く

残りの漢字表記の「仰天」を分析してみたところ、いずれも以上の三つの意義として用いられていると判断される。尚、「仰天」のよみについては、よみの明らかな「天ニ（ヲ）仰グ」「仰天ス」の意味と比較してみれば、(一)と(三)の意味を表す「仰天」は各々「天ニ（ヲ）仰グ」「仰天ス」と意味的には重なっているため、それと同じようなよみをすると推定される。一方、(二)の意味の「仰天」は「仰グ」対象は(一)のと異なるが、意味的に考えれば、「仰天ス」より「天ニ（ヲ）仰グ」と同じように訓む方が適当ではないかと判定されよう。

結び

以上の考察を通して本稿の主旨は次のように纏めることが出来る。中国語に出典を持つ「仰天」は早くも奈良時代文献に現れて、中国語の本来の意味用法のままで用いられ、「天ニ（ヲ）仰グ」というよみ方を以て中国語の連語形式に対応した。以来、平安、鎌倉時代を経て室町時代に至っても「天ニ（ヲ）仰グ」というよみは存続しつづけて、意味も中国語の本来のものと変わらなかった。「天ニ（ヲ）仰グ」に続いて「仰天ス」という字音よみが生まれてきた。「仰天ス」はその字音よみの登場に伴って、「天ニ（ヲ）仰グ」と異なり、中国語には見えない新しい意味が発生した。いわば、よみによる意味変化が起こった。この二種類のよみはそれぞれ違った意味を表すため、共存の道を歩みつづける。尚、彼様な意味変化は、中国語の「仰天」も日本語の「天ニ（ヲ）仰グ」も多くは「歎、驚」などの感情表現と共起してその状態を表すという用法上の特徴がその土台となって、「天ニ（ヲ）仰グ」の連語形式から「仰天ス」という一語に変容したことに伴って、常に共起する感情表現の意味まで吸収して出来たのではないかと考えられる。いわば、本来の意味と変化した意味との間に用法上の関連性が内在していることは意味変化の一因かと思われる。また、生々しい強い表現効果を狙おうという表現意識も働いているようである。つまり、「仰天ス」を使うと、本来の「天ニ仰グ」という具象性を想起させながら「驚く」を表すことになり、単に「驚く」と言うよりその「驚き」がつよくて如実に感じられることになる。それは右記の例(26)の「仰天ス」を使う所に、参考例では「驚く」ではなく「大いに驚く」を用いていることからも示唆されよう。また、「驚、歎、愁」などの多様な感情を表出するだけではなく、それらの程度の甚しさをも表すことが出来る。彼様な表現上の幅をきかせる適応性、便宜性も「仰天」の意味を変化させた背景の一つと言えう。

「仰天」はよみによる意味変化が生じた漢語の一例であることが明らかになる。漢語の意味変化の要因を考える場合、よみによることにも注目を要する。

注

(1) 拙稿「『延慶本平家物語』に於ける漢字表記語のよみと意味について――「心地」を中心に――」(『国文学攷』127号広島大学国語国文学会)、「漢語の意味変化について――「以外」を中心に――」(『鎌倉時代語研究』第19輯鎌倉時代語研究会)を参照されたい。

(2) 『万葉集』にも「仰ゝ天」(巻九1809)が一例見られて「天仰ぎ」と訓まれている。

(3) 『漢語大詞典』(上海辞書出版社)巻一1208頁

(4) 今回調査した限りの奈良時代から室町時代までの日本文献では、「天ニ仰グ」は殆どであるが、例(4)と(22)のように「天ヲ仰グ」と訓読される例も二例見える。「天ニ仰グ」と「天ヲ仰グ」は統語上では「ニ」と「ヲ」との違いが存しているが、意味的には両者とも「空(上)を見上げる」という意味を表し、特に弁別的な意味の差異がないように見える。従って、本稿では両者を意味的に分けることなく扱う次第である。敢えて差異を求めるならば、「天ニ仰グ」は、方向性を際立たせるのに対して、「天ヲ仰グ」は「仰グ」という動作を直接に受ける目的語に重点を置いて表現するといった機能的な微差が感じられる。

(5) 「Tẽniauogui, chinifusu.(天に仰ぎ、地に伏す)非常に煩悶している時とか、何物かを切望する時とかに、あるいは天を見上げ、あるいは地上に腹ばいになる」のように説かれている。(『邦訳日葡辞書』40頁、岩波書店)

(6) 『今昔物語集』の当該個所の頭注によれば「天ニ仰グ」と同義とされる。

(7) 『今昔物語集』(大系本)の頭注によれば「手ヲ捧テ」は「拱手傍観の意か」とされるが、小学館『今昔物語集』では「驚きあわてるさま」と頭注されている。

(8) 拙稿「漢語の意味変化について――「天氣」を中心に――」(『広島国際研究』第一巻、広島市立大学国際学部)を参照されたい。

検索文献

本稿の為に調べた中日両国文献は『鎌倉時代語研究』第二十一輯に収められている拙稿「「民烟」小考」と同じくして、それを参照されたい。

［付記］

本稿は平成九年度鎌倉時代語研究集会に於ける口頭発表をもとに加筆したものである。席上、諸先生より貴重な御教示を賜わり、記して深謝申し上げる。